



小学校英語の指導に向けて ～効果的な校内研修に向けて～

町田 智久（国際教養大学専門職大学院 准教授）

各学校では、新年度からの移行措置に向けての準備が急ピッチで進められていると思います。日本全国の小学校において、小学校3・4年生では年間15時間、5・6年生ではこれまでの外国語活動の35時間に加えて、新たに年間15時間の計50時間、英語の授業が行われます。中には先行実施を目指し、小学校3・4年生で年間35時間、5・6年生で年間70時間を確保している自治体や小学校も見られます。時数に関してはバラつきがありますが、授業に向けての準備に関しては、どの小学校においても万全を期しておくべきでしょう。

今回は、新年度の移行措置や先行実施を前に、学校全体でどのように準備していくかについて、具体例を示しながら述べていきます。その前に、秋田県の2つの小学校の取り組み例を紹介します。

A 小学校：イングリッシュ・デーの設置

A小学校では、毎週火曜日をイングリッシュ・デーとして、全校で英語に親しむ活動を取り入れています。具体的には、教室や廊下で会った時のあいさつを英語にします。子どもたち同士でも、外からの来客に対しても子どもたちは元気に「Hello!」とあいさつをします。また、朝の会のあいさつや健康観察も、この日だけは英語で行います。先生が「Good morning. Mr./Ms. ○○. How are you?」と尋ねると「I'm fine.」や「I have a stomachache.」など自分たちの健康状態を英語で答えます。さらに、お昼の放送も英語です。このように、学校全体で英語に取り組もうという雰囲気を作り出し、英語を身近な存在として捉えています。

B 小学校：教室英語フレーズ集の作成

B小学校では、高学年の教員とALTが中心となって授業で使える英語のフレーズ集(教室英語集)を作成しました。さらにB小学校では、そのフレーズ集を6年生の教員とALTとでCDに録音して全教員に配布し、通勤途中に聞いてもらうようにしています。それによって、多くの教員が不安なく必要な英語表現を使えるようになり、教室での教員の英語使用の割合も非常に高まってきました。この取り組みで、この学校では英語の授業は英語で行おうという雰囲気が高まり、学校が一丸となって英語教育に取り組んでいます。

以下、新年度からの小学校英語教育に向けて、学校全体として何をすべきかについて、考えていきます。

1. 新教材を知る

昨年9月には5・6年生用の新教材『We Can!』が、12月には3・4年生用の新教材『Let's Try!』が、文部科学省から各自治体や学校にネット配信されました。すでに中身をご覧になった先生方も多いと思いますが、残念ながらまだの先生方もいます。まずは、全教員が新しい英語教育の目指すゴールを確認する意味でも、それぞれの新教材を手にとることが大切です。加えて、文部科学省から出されている新しい学習指導要領や、「英語教育の抜本的強化のイメージ」⁽¹⁾などを参考にしながら、これまでの外国語活動と新しい外国語(英語)との違いを知ることが不可欠です。

新しい外国語(いわゆる小学校英語)では、より高度なコミュニケーション能力が求められます。小学校段階では、CEFR(ヨーロッパ共通言語参照枠)でのA1を目指すことになっていきますが、それが何であるのか、またどのような力をつけるべきなのかを知る必要があります。具体的には、自分や身近な人・こと(例えば家族や友達、好み、場所、気持ちなど)について簡単な英語で表現し、やり取りすることができるようになる必要があります。学習語彙数や文法事項なども増えますが、これは単に中学校英語の前倒しではありませんし、昔ながらの訳読の英語教育でもありません。子どもたちの英語のコミュニケーション能力を伸ばすために、英語の4技能(聞く・話す・読む・書く)を駆使して学習する、新しい英語教育なのです。それを理解した上で、『We Can!』や『Let's Try!』をどのように活用していくのか、学校内で共通理解を図っていくべきだと思います。

2. 英語のための校内研修を実施する

新年度は校内研修の中に、小学校英語のための研修会を複数回設定することをお勧めします。その内容については、これまでの連載を参考にしながら次の3つについて行って下さい：①英語を指導する上で小学校教員の持つ強みの理解、②聞くことを中心とした英語指導のあり方の確認、③インプットを多くするための教室英語の習得。以下、それぞれについて述べていきます。

① 英語を指導する上で 小学校教員の持つ強みの理解

先生方の中には、英語に苦手意識を持っている方もいます。英語の発音や文法が苦手だとか、英語表現がなかなか出てこないという声も聞きます。しかし、私たちはALTなどのネイティブ・スピーカーと同じように英語を話す必要はありません。外国語として英語を学んだ経験を踏まえ、英語学習の楽しさや、つまりき易いポイント、さらには日本語との違いなどを指導していけるはずです。また、他教科での指導を生かしながら、児童一人一人を見取る力は担任だからこそその強みです。英語に対して苦手な部分ばかりを意識するのではなく、英語を指導する担任教師としての強みを理解することが大切です。

② 聞くことを中心とした 英語指導のあり方の確認

新しい小学校英語では、4技能の指導が求められます。しかし、4技能を均等に指導するわけではありません。小学校段階では「聞く」ことに重きを置いたインプット中心の指導を心掛けるといいでしょう。現状では、十分なインプットを行わずに、すぐに発表活動などのアウトプットに移ってしまう授業も多く見られます。小学校段階では、視覚情報も活用しながら(例えば、カバの写真を見せながらhippoと言うなど)様々な形での「聞く」活動を行って下さい。その際、子どもたちのレベルよりも少し上のレベル(i+1)のインプットを心掛け、単語や表現だけに注目させるのではなく、全体のテーマや背景についても考えさせながら、聞かせることも大切です。

③ インプットを多くするための教室英語の習得

学習指導要領で規定されてはいませんが、小学校においても英語の授業はなるべく英語で行いたいものです。先生方が英語学習のロールモデルとして、英語を使う姿を授業中に見せなければ、子どもたちが日本人としてどのように英語を話すのかというイメージは持てません。さらに、教室という限られた英語の学習環境で、より多くのインプットを効果的に児童に与える

PROFILE

町田 智久 まちだ ともひさ (国際教養大学専門職大学院 准教授)

1970年東京都生まれ。米国イリノイ大学アーバナ・シャンペーン校大学院修士課程修了(英語教授法専攻)。同博士課程修了(初等教育専攻)。東京都の公立中学校に英語教諭として12年勤務後、退職し留学。帰国後、国際教養大学EAPプログラム講師を経て現職。

『Teacher Education and Professional Development in TESOL』(第11章: Routledge)、『Keirinkan Science Readers』(啓林館)など。

ためにも、教師が英語を使って指導することは欠かせません。その際に必要になるのが「教室英語」です。Raise your hand. (手を挙げて下さい)やWork in pairs. (ペアで活動して下さい)など、教室で授業中に教師が使う決まった表現です。全教員が共通した教室英語を使っていくことで、児童も英語での授業に慣れていきますし、自然と英語のインプット量も増えていきます。ALTだけが英語で指導するという考えから脱却し、担任教師も英語で指導していく体制を築くことが大切です。

3. 小・中連携を進め、中学校の授業を参観する

学習指導要領の改訂に伴い、小学校と同様に中学校でも新しい英語教育に向けての変更点があります。具体的には、学習語彙数の増強と共に、教師が英語の授業を英語で行うことです。つまり今後中学校では、より英語をコミュニケーションの道具として使いながら、英語を指導していくことが求められます。その様子を小学校の先生方が参観することで、小学校英語教育のゴールをイメージし易くなります。「子どもたちは中学校に行ったら、こういう授業を受けるのか。」というイメージを持つことは、小学校での授業を進める上でも参考になります。同じ中学校区にある近隣の小学校と合同で、中学校英語の授業を参観することは意味のあることです。小・中連携が叫ばれて久しいですが、より実のある連携にするためにも、授業参観は欠かせません。

秋田県では、さらに一歩進んだ取り組みを行っている自治体もいくつかあります。ある自治体では、小・中連携の一環として同じ中学校区内の小学校6年生と中学校1年生の教員が、互いの学校でチーム・ティーチングをし合う活動をしています。4月には6年生の担任が中学校に送り出したばかりの子どもたちに、中

学校英語科の先生と一緒に中学校の教室で英語を教えます。そして、3月には中学校英語科の先生が小学校を訪れ、6年生の担任と一緒に英語で英語を指導します。この連携を通して、子どもにとっては中1ギャップの解消につながりますし、教師にとってもお互いの英語の授業を知る良い機会になっています。

4. 学校全体で取り組む体制を作る

全体を通して最も大切になるのが、学校全体で英語教育改革に取り組むことです。これまで多くの小学校では、高学年の先生方が中心となって外国語活動に取り組んできました。外国語活動が始まって10年近くが経ちますが、いまだに一度も外国語活動に携わったことがない先生方もいます。今後、新しい小学校英語教育は3年生から始まります。少なくとも全教員の3分の2の先生方が外国語活動・外国語を指導することになります。もう無関心ではいられません。英語の専科教員が配置されるのは、比較的財政が豊かな自治体や大規模な自治体を中心となると思われます。校長先生のリーダーシップのもと、一人一人の先生が腹をくくって積極的に取り組むことが大切です。

これまで多くの小学校の実践を見てきましたが、英語教育に成功している学校は全て、巻頭で紹介した小学校のように、全教職員が一丸となって取り組んでいる学校でした。英語教育改革は、学校全体で取り組まなくては成し遂げられません。子どもたちの英語コミュニケーション能力を向上させるためにも、「チーム学校」での準備が求められます。

[引用・参考文献]

- (1) 文部科学省. (2017). 英語教育の抜本的強化のイメージ.
Retrieved from http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_jcsFiles/afieldfile/2017/01/20/1380902_3_3_1.pdf.

外国語活動における問題解決的学習

～「英語を使ってできること」を実感する学習を目指して～

岩村 鋭介 (札幌市立伏見小学校 主幹教諭)

1. はじめに

近年、社会は急速にグローバル化、情報化、技術革新が進んできています。今後、子どもたちには様々な人々とともに変化に対応し、持続可能な社会の担い手として活躍することが求められます。

このような変化する社会にあって、子どもたちは多くの問題に直面することでしょう。そのような場面で、問題を自分事として捉え、周りの人々と力を合わせ、解決していこうとする態度の育成が重要となってきます。

2. 日常の授業で問題解決を

変化に対応し、未来を切り拓く子どもたちを育成するには、子どもたちが日常の授業の中でも、問題を解決していく経験が必要となってきます。外国語活動においては、言語活動を通じて友達や周りの人々に自分の伝えたいことを伝えることが重要となります。

その中で、「もっと自分の思いを伝えるためにはどうするとよいか」「これまで学んだ表現を生かすことはできないか」と人に伝えるための方策を考えることが問題解決につながります。伝えたい思いを相手の反応を見て、よりよく伝えようとするのが子どもにとっての問題となります。そして、「友達に伝わった」という経験が子どもにとって問題解決をした経験となります。

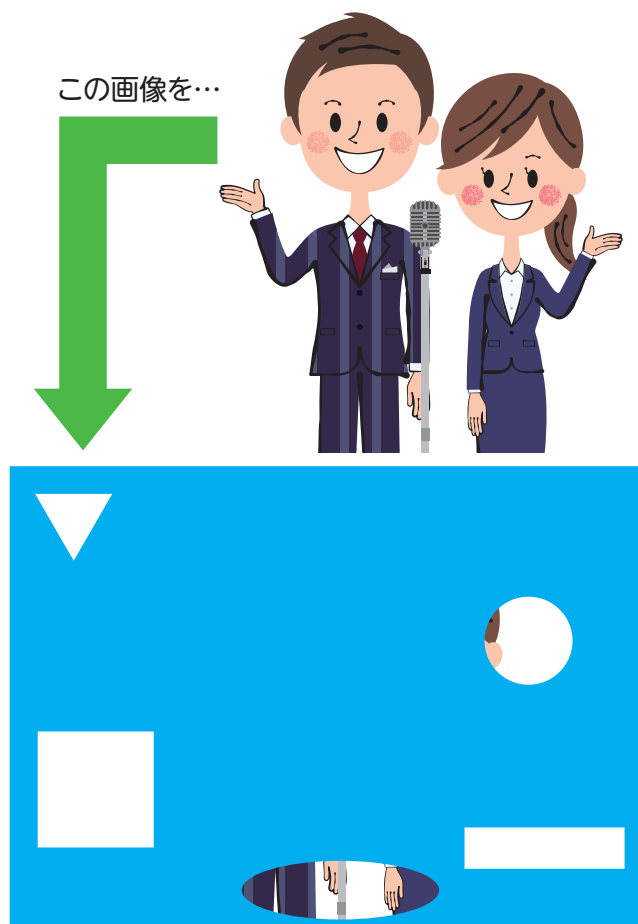
子どもが外国語活動の中で、問題を自分事として捉え、友達とともに知識を総動員し、解決する姿を授業の中で目指すことが大切です。

3. 提示を工夫して問題を生む

英語表現に慣れ親しむ場面でも、子どもたちが英語を使って問題解決する場面を生み出すことができます。

例えば、見えそうで見えない絵を用意すると子どもたちの中から「もっと見たい」「答えを知りたい」という思いが生まれます。もっと見るためには、もっと情報を得るためには、どんな英語表現があるとよいか子どもに聞くと、子どもは既習の中から効果的な言葉を選択します。

6年生の「Hi, friends! 2」のLesson8 “What do you want to be?” の学習で “comedian” という英語表現を紹介する際、下のような画像を使いました。



子どもたちは、「もっと右」「もっと左」「上」「下」と言って何とか画像を見ようとします。Lesson4 で学んだ “right” “left” や子どもが日常生活の中で耳にしたこ

PROFILE

岩村 鋭介 いわむら えいすけ （札幌市立伏見小学校 主幹教諭）

平成29年から現任校で英語専科教員として外国語活動を指導している。平成14年度から平成16年度の3年間、在外教育施設であるロンドン日本人学校で勤務。在外教育施設における英語教育に携わった。札幌市の教員に向けて英語教育指導法研修の講師を務め、英語教育推進リーダーの認定を受ける。平成27年より札幌小学校英語活動研究会研究部長として研究を推進している。

とがある“up”“down”といった英語表現が役立つことに気づき、使い始める姿が生まれました。

また、それでもわからない場合には、“Hint, please.”といった英語も出されました。このように、自分の「知りたい」といった思いを達成するために、既習や生活経験を総動員して何とかしようという姿が生まれました。

4. 学びの場を工夫して問題を生む

5年生の「Hi, friends! 1」のLesson5 “What do you like?”の学習で、友達にTシャツをつくる活動があります。パソコンに入っている「Hi, friends! 1」のデジタル教材を使って、相手のデザインを聞き取り、Tシャツを作ります。下のようなパソコン室を使い、授業を行いました。



その際に、ペアを向かい合わせの友達と組むようにし、デザインを伝え合うようにしました。そうすることにより、子どもは相手のデザインを英語表現だけを頼りに聞き取ることになります。最初、自分のデザインしたいTシャツと、相手がパソコンで作ったTシャツのデザインにずれが生じます。この活動の後に中間

交流の場を設定して、「やってみてどうだったか」を問います。すると、思い通りのデザインになった子と、ならなかった子に分かれます。子どもたちの中に「どうすれば相手に正しく伝わるだろう」という問題が生まれます。

解決するためには、「もっと声をはっきりと言う必要がある」「何回も言ってほしい」「わからなかったら何回も聞けるようにしたい」といった、コミュニケーションの際に大切な要素が子どもたちからたくさん出されました。また、自分の考えたデザインを伝えるための英語表現も出てきました。そこで、“right”“left”“up”“down”“big”“small”“one”“two”といった英語表現の大切さを再確認しました。

中間交流を通して、「どんな伝え方が大切か」「どんな英語表現が必要か」ということを理解した子どもたちは、再度ペアでTシャツのデザインを伝え合いました。子どもたちは、中間交流で確認したことを意識して伝え合うとともに、完成したTシャツを自分のデザインと見比べて似ていることに喜びを感じていました。「英語でできること」を活動の中で実感する姿が生まれました。

6. おわりに

新学習指導要領においても、思考力・判断力・表現力等の育成が重要となってきます。外国語活動の中でも、子どもが言葉について考え、活動を通じて言葉の大切さを実感できるような授業づくりに今後も取り組んでいきます。

【引用・参考文献】

文部科学省 「Hi, friends! 1」

「Hi, friends! 2」

一人ひとりが成長するチームを目指して

～ Team Misawa for Elementary School English Education ～

田中多恵子（三沢市小学校英語教育コーディネーター）

1. 地域に密着した特色ある英語教育

私たちの街、三沢市には米軍基地があり、よく子どもから大人までの国際交流が行われています。そのように生活の中で「生きた英語」に触れる機会が多い三沢市民ですが、学校現場にも平成元年にスタートした外国人講師派遣事業を通して、これまでに数多くの外国人講師の方々が英語活動と異文化理解学習のために訪れています。

三沢市小学校英語活動科の授業は、英語教育推進特区から教育課程特例校を通して、平成18年に（1年生－34時間、2～6年生－35時間）開始され、平成19年にはすべての授業に英語指導助手（以下AET）を配置し完全実施になりました。それ以来約10年間、課題を抱え、試行錯誤を重ね、私たちは「チームの力」と「ぶれない軸」を持つことの大切さを知りました。

【4つの軸】

1. 学びの保障（学力＋非認知的能力）
2. 教師の専門性
3. 役割の確立
4. 異文化理解

チームは、「小学生／中学生」、「教師／学校」、「地域、高校、大学、アメリカンスクール」、「外国人講師、AET」、「コーディネーター」、「教育委員会」等から成り立ち、【4つの軸】を基にそれぞれが自分の役割を理解し、1つの目標に向かいます。

私たちが掲げる「4つの軸」はこれらのことが基本になっています。

1. 公教育として「すべての児童」に学ぶ機会を与える。「分かる、できる」を実感できる授業を試みる。
2. そのために児童の実態をよく知る小学校教師（学級担任）が主体となり、その専門性を活かし、発達段階に応じた指導、そして教科横断的な指導を行う。
3. 主体的に学び続ける力を育むためには、系統的小中高大連携において、小学校の役割を理解し、市内小学校の同一取り組みを中学校に接続する。小学校から大学・成人までつなぐことが必要とされる。
4. 地域の特性を活かし、外国人材を最大限に活用する。外国と自国の言語や文化に触れさせることによって異文化への気付きを促す。

2. 「学ぶ」授業を創る



三沢市では学習指導要領を基にした独自の指導計画を活用しています。市内全小学校が同じ指導略案を使用することによって学校間のバラつきをなくし、中学校に接続します。各学校・各学級担任はその指導略案を基に「楽しく学ぶ」授業研究・教材研究を行い、年に

PROFILE

田中 多恵子 たなか たえこ (青森県三沢市小学校英語教育コーディネーター)

小学校英語コーディネーター、外国人講師派遣事業(英語教育・国際理解教育)外国人講師担当。大学で数学を学んだ後、三沢米軍基地アメリカンスクールにて、ボランティア講師(算数・数学/交流事業)を務める。また放送大学大学院科目生として教育学を学ぶ。これからの主な関心はアメリカと日本の算数・数学教育を比較し、英語と算数・数学のコラボ授業を研究することです。

一度の英語活動科授業研究会にて大学の先生から助言をいただきます。

3. ことばでつながるコミュニケーション



授業を共にするAETは主に学校教育経験者を採用しています。学級担任の動き(指導と評価の一体化)を理解し、学級担任や子どもたちとコミュニケーションを図ります。コーディネーターは通年、各学校、各学級を訪れアクションリサーチを通して直接子どもたちや学級担任と触れ合い、その後、課題や改善について学校、教師、AET等と話し合います。そしてそれがさらなる指導計画改訂に繋がっていきます。また、授業の一環として5、6年生と中学1年生が継続して同じ教材(主に「読む」「書く」)を使用、高校生との学習交流、アメリカンスクールの子どもたちとの国際交流、いろいろな国の方を招いての異文化理解学習なども授業に取り入れています。そして、年に一度大学の講義にて三沢市の小学校英語実践を紹介し、学生さんからたくさんの意見をいただきます。



4. チームとして成長を！

世界の動きや時代の変化のスピードがどんどん速くなってきています。そして、そんなグローバル社会を生き抜くための方策の1つが、21世紀型スキルを身に付けることだと思います。まさに、新学習指導要領はそれを示していますが、私たちが抱える課題は、まだまだ多くあります。今、未来に備える学習として、私たちにできることは何かを“Team Misawa”のメンバーと探り、学び合い、一人ひとりが成長していけたらと思っています。

外国語不安の解消！ 1歩前へ踏み出す！

平成30年4月発売予定

価格 15,000円+税

「ALTに対して日常的なことは伝えることは出来るんですけど、やっぱり授業内容でこれをして欲しいとか、何かこういう反応やタイミングでやって欲しいとか、何かこうざとわからない振りをして欲しいとか、あるじゃない、そういうのは、伝えられない。だから、指導系ははっきり言って無理ですね。こっちはこうして欲しいはあるんですけど。」



Classroom Language

- | | |
|----------------|-------------|
| A : 授業の開始 | G : 児童への指示 |
| B : 前回の授業の復習 | H : 児童の理解確認 |
| C : 新しいトピックの導入 | I : 児童への声かけ |
| D : 新出単語の導入 | J : 読み物の朗読 |
| E : 新出表現の導入 | K : 自己評価 |
| F : アクティビティ | L : 授業の終了 |

3つのルール

- I. 既習の項目から未習の項目へ
- II. 受信活動から発信活動へ
- III. 個の活動から小グループの活動を経て全体の活動へ

新課程対応 小学校外国語

教員研修用キット

著作・監修 国際教養大学専門職大学院准教授 町田 智久

特徴

- 平成30年度からの移行措置及び先行実施にむけて、主に校内研修をアシストする教員向けの映像教材です。先生方のご事情に応じて手軽に活用できます。
- 著作者である町田先生が実施している研修プログラムを題材に扱っています。「外国語不安の解消」をテーマに、外国語指導に苦手意識を感じている先生方に不安なく授業を進めていただけるだけの知識とスキルが身に付けられるような構成になっています。
- DVDは、話題ごとにチャプター分けしてあるので、特定の部分について振り返りや、繰り返し受講が可能です。
- 特典として、発音トレーニングソフトを掲載。パソコンを使って自らの発音を手軽にチェックできます。

研修のラインナップ

- 第Ⅰ部 外国語不安を和らげよう。(約90分)
- 第Ⅱ部 自信を持って発音しよう。(約90分)
→ATR研究所が開発したトレーニングシステムを活用。
- 第Ⅲ部 英語表現と指導手順を学ぼう。(約90分)
- 第Ⅳ部 ティーチャートークを身に付けよう。(約90分)



仕様

- ・研修映像：DVD-ROM 4枚
- ・発音トレーニングソフト：CD-ROM 1枚
- ・各種データ：CD-ROM 1枚
- ・解説書：B5判、144ページ
- ・Ⅰ～Ⅳ部構成で、各部に対応したDVDと研修レジュメとワークシート付き。
(データだけでなく、解説書内にあるのでコピーですぐにご利用できます。)

編集・発行 啓林館東京本部 TEL(03)3814-5183(直通) デザイン・印刷 エイブル・株式会社スタジオヤマト・木野瀬印刷株式会社

教授用資料

Fun with ENGLISH 2018 冬号

—— 知が啓く。——
啓林館

<http://www.shinko-keirin.co.jp>

本社	〒543-0052	大阪市天王寺区大道4丁目3番25号	TEL(06)6779-1531
東京支社	〒113-0023	東京都文京区向丘2丁目3番10号	TEL(03)3814-2151
北海道支社	〒060-0062	札幌市中央区南二条西9丁目1番2号 サンケン札幌ビル1階	TEL(011)271-2022
東海支社	〒461-0004	名古屋市東区葵1丁目4番34号双栄ビル2階	TEL(052)935-2585
広島支社	〒732-0052	広島市東区光町1丁目7番11号広島CDビル5階	TEL(082)261-7246
九州支社	〒810-0022	福岡市中央区薬院1丁目5番6号ハイヒルズビル5階	TEL(092)725-6677